

1) 筋ジストロフィー症に対するヒト Growth hormone の治療効果

里 吉 菅二郎*

研究協力者 木下 真男* 川崎研一* 中里 厚*
亀井 敦行* 石田哲郎*

我々はこれまで、動物から抽出した Growth hormone (SOMACTON) を用いて、ヒト進行性筋ジストロフィー症、dystrophy mouse などにおける効果を検討してきたが、その結果は未だ明確な結論は得られていない。問題のひとつには異種動物間において Growth hormone が、効果を発現し得るかかどうかという点であり、その意味から、今回はヒトの Growth hormone を用いて、2例の患者について影響を検討してみた。

研究対象と方法

症例 1. 筋強直性ジストロフィー症

28才女子、26才頃より上肢の運動障害出現し、徐々に増悪。現在ミオパチー様顔貌、翼状肩甲、ミオトニア現象、顔面、上肢の筋力低下が認められ、握力は右 0 kg、左 3 kg であった。

症例 2. 肢帯型筋ジストロフィー症

43才男子、23才頃より下肢の脱力に気づきはじめ、24才時より上肢にも筋萎縮・脱力が出現し、筋ジストロフィー症と診断された。

31才時より車椅子生活をつづけている。

ヒト Growth hormone 1 mg 週 3 回筋注を行い、体重・握力・血中 CPK・尿中クレアチン・クレアチニン排泄量について変動を観察した。

結果及び結語

ヒト Growth hormone 20回注射時点にお

いて、症例(1)(2)ともに体重は注射前に比して明らかな変動はなかった。しかし、その後更に10回続けた時点で症例(1)では、2.5 kg (44.5 → 47 kg) の増加を見ている。血中 CPK は、前値 (50 → 100 単位の範囲内で変動、正常50まで) に比し、注射後も明らかな変化なし。

握力は症例(1)で 0 → 2 kg と僅かながら上昇を示し、筋力全体としては、自覚的には両例とも少し良いと述べている。しかし、他覚的に明瞭に把握できるような変動はない。筋萎縮については、症例(1)で、前腕の太さがやや増加した。

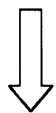
尿中クレアチニンは、症例(1)で注射前 10 mg/kg/day 程度であったのに、注射後 15 mg/kg/day と約 50% の上昇を見た。しかしクレアチンも僅かながら増加の傾向を示した。両方の合計では約 60% の増加となっている。症例(2)においても両方の合計値が僅かながら増加している。

以上のようにヒト Growth hormone は症例(1) (筋硬直性ジストロフィー症) には、臨床的に僅かながら改善の兆を見せている。しかし症例(2) (肢帯型ジストロフィー症) では明らかな効果はなく、ただ自覚的に多少の改善を示すのみである。一方、クレアチン・クレアチニンは両例において増加の傾向を示し、これは合成系に関して促進的に働いたものと理解されるが、症例(1)ではクレアチニンの増加が明らかであり、この点何らかの形で筋機能の改善があったものと推定される。

これらのことを考えると、ヒト Growth hormone 療法は猶試みるべき余地があり、特

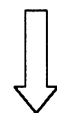
* 東邦大学医学部第四内科

に筋硬直性ジストロフィー症では有効な結果
が得られる可能性もあるものと期待される。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



我々はこれまで、動物から抽出した Growth hormone(SOMACTON)を用いて、ヒト進行性筋ジストロフィー症,dystrophy mouse などにおける効果を検討してきたが、その結果は未だ明確な結論は得られていない.問題のひとつには異種動物間において Growth hormone が、効果を発現し得るかかどうかという点であり、その意味から、今回はヒトの Growth hormone を用いて、2 例の患者について影響を検討してみた.